

片恋

芥川龍之介

青空文庫

(一しよに大学を出た親しい友だちの一人に、ある夏の午後京けいひ浜電車んでんしゃの中で遇あつたら、こんな話を聞かせられた。)

この間、社の用でYへ行つた時の話だ。向うで宴会を開いて、僕を招しょうだい待たいしてくれた事がある。何しろYの事だから、床の間には石版摺せきばんずりの乃木大将の掛物がかかつていて、その前に造花ぞうかの牡丹ぼたんが生けてあると云う体裁だがね。夕方から雨がふつたのと、人数にんずも割に少かつたのとで、思ったよりや感じがよかつた。その上二階にも一組宴会があるらしかつたが、これも幸いと土地がらに似ず騒がない。所が君、お酌しやくにん人にんの中に――

君も知つているだろう。僕らが昔よく飲みに行つたUの女中に、

お徳とくって女がいた。鼻の低い、額のつまつた、あすこ中じゆうでの茶目
だつた奴さ。あいつが君、はいつているんだ。お座敷着で、お鉢
子を持って、ほかの朋輩ほうばいなみに乙につんとすましてさ。始はじめは僕
も人ちがいかと思つたが、側そばへ来たのを見ると、お徳にちがいな
い。もの云う度に、顛あじをश्यकる癖も、昔の通りだ。——僕は実
際無常を感じてしまつたね。あれでも君、元は志村しむらの岡惚おかぼれだつ
たんじやないか。

志村の大將、その時分は大真面目おおまじめで、青木堂へ行つちやペパミ
ントの小さな鑷びんを買つて来て、「甘いから飲んでごらん。」など
と、やつたものさ。酒も甘かつたろうが、志村も甘かつたよ。

そのお徳が、今じやこんな所で商売をしているんだ。シカゴに

いる志村が聞いたら、どんな心もちがするだろう。そう思って、声をかけようとしたが、遠慮した。——お徳の事だ。前には日本橋に居りましたくらいな事は、云っていないものじゃない。

すると、向うから声をかけた。「ずいぶんしばらくだわねえ。私がわたしにいる時分にお眼にかかった切りなんだから。あなたはちつともお変りにならない。」なんて云う。——お徳の奴め、もう来た時から酔っていたんだ。

が、いくら酔っていても、久しぶりじゃあるし、志村の一件があるもんだから、大おおに話お話しがもてたろう。すると君、ほかの連中が気を廻わすのを義理だと心得た顔色で、わいわい騒ぎ立てたんだ。何しろ主人役が音頭おんどうをとって、逐一白状に及ばない中は、席を

立たせないと言うんだから、始末が悪い。そこで、僕は志村のペ
パミントの話をして、「これは私の親友に臂ひじを食わせた女です。」
——莫迦ばか莫迦ばかしいが、そう云った。主人役がもう年配でね。僕は
始から、叔父さんにつれられて、お茶屋へ上つたと云う格だった
んだ。

すると、その臂と云うんで、またどつと来たじゃないか。ほか
の芸者まで一しよになつて、お徳のやつをひやかしたんだ。

ところが、お徳こと福竜のやつが、承知しない。——福竜がよ
かつたろう。八犬伝の竜の講釈の中に、「優樂自在なるを福竜と
名づけたり」と云う所がある。それがこの福竜は、大に優樂不自
在なんだから可笑おかしい。もつともこれは余計な話だがね。——そ

の承知しない云い草が、また大に論理的ロジカルなんだ。「志村さんが私にお惚れになったつて、私の方でも惚れなければならぬと云う義務はござんすまい。」さ。

それから、まだあるんだ。「それがそうでなかつたら、私だつて、とうの昔にもつと好い月日があつたんです。」

それが、所謂片恋の悲しみなんだそうさ。そうしてその揚句にエキザンプル例でも挙げる気だつたんだろう。お徳のやつめ、妙なろけを始めたんだ。君に聞いて貰おうと思うのはそのろけ話さ。どうせのろけだから、面白い事はない。

あれは不思議だね。夢の話と色恋の話くらい、聞いていてつまらないものはない。

（そこで自分は、「それは当人以外に、面白さが通じないからだよ。」と云つた。「じゃ小説に書くのにも、夢と色恋とはむずかしい訳だね。」「少くとも夢なんぞは感覺的ただけに、なおそうらしいね。小説の中に出て来る夢で、ほんとうの夢らしいのはほとんど一つもないくらいだ。」「だが、恋愛小説の傑作は沢山あるじゃないか。」「それだけまた、後世こうせいにのこらなかつた愚作の数も、思いやられると云うものさ。」）

そう話がわかつていけば、大に心づよい。どうせこれもその愚作中の愚作だよ。何しろお徳の口吻こうぶんを真似ると、「まあ私の片恋つて云うようなもの」なんだからね。精々そのつもりで、聞いてくれ給え。

お徳の惚れた男と云うのは、役者でね。あいつがまだ浅草田たわら

原町まちの親の家にいた時分に、公園で見初みそめたんだそうだ。こう

云うと、君は宮戸座みやとぎか常盤座ときわざの馬の足だと思うだろう。ところが

そうじゃない。そもそも、日本人だと思うのが間違いなんだ。毛け

唐とうの役者でね。何でも半道はんどうだと云うんだから、笑わせる。

その癖、お徳はその男の名前も知らなければ、居いどころ所も知らな

い。それ所か、国籍さえわからないんだ。女房持か、独り者か—

—そんな事は勿論、尋きくだけ、野暮やぼさ。可笑しいだろう。いくら

片恋だつて、あんまり莫迦ばかげている。僕たちが若竹へ通つた時分

だつて、よしんば語り物は知らなかうが、先方は日本人で、芸

名昇しょうぎく 菊きくくらいな事は心得ていたもんだ。——そう云つて、僕

がからかったら、お徳の奴、むきになって、「そりや私だって、知りたかつたんです。だけど、わからないんだから、仕方がないじゃありませんか。何しろ幕の上で会うだけなんですもの。」と云う。

幕の上では、妙だよ。幕の中でと云うなら、わかっているがね。そこでいろいろ聞いて見ると、その恋人なるものは、活動写真に映る西洋の曾我の家なんだそうだ。これには、僕も驚いたよ。成程幕の上には、ちがいない。

ほかの連中は、悪い落だと思つたらしい。中には、「へん、いやにおひやかしゃがる。」なんて云つた人もある。船着だから、人気荒いんだ。が、見たところ、どうもお徳が嘘をついている

とも思われぬ。もつとも眼は大分だいぶんとろんこだったがね。

「毎日行きたくつても、そうはお小遣こづかいがつづかないでしょう。

だから私、やつと一週に一ぺんずつ行って見たんです。」——こ

れはいいが、その後あとが振っている。「一度なんか、阿母おつかさんにね

だってやつとやつて貰うと、満員で横の隅の所にしか、はいれな

いんでしよう。そうすると、折角その人の顔が映つても、妙に平

べつたくしか見えないんでしよう。私、かなしくつて、かなしく

つて。」——前まえ掛かけを顔へあてて、泣いたつて云うんだがね。そ

りや恋人の顔が、幕なりにぺちやんこに見えちや、かなしかろう

さ。これには、僕も同情したよ。

「何でも、十二三度その人がちがった役をするのを見たんです。

顔の長い、痩せた、髯ひげのある人でした。大抵黒い、あなたの着ていらつしやるような服を着ていましたつけ。——僕は、モオニングだったんだ。さつきで懲こりているから、機先を制して、「似ていやしないか。」って云うと、すまして、「もつといい男」さ。「もつといい男」はきびしいじゃないか。

「何なんしろあなた、幕の上で遇うだけなんでしょう。向うが生身いきみの人なら、語ことばをかけるとか、眼で心意気を知らせるとか出来るんですけど、そんな事をしたって、写真じゃね。」おまけに活動写真なんて云いますがね。思われぬ人だって、思われるようにはしむけられるんですよ。志村さんにしたって、私によく青いお酒を持

つて来ちやくだすった。それが私のは、思われるようにしむける事も出来ないんです。ずいぶん因果じやありませんか。」一々御ごももと尤もだ。こいつには、可笑おかしい中でも、つまされたよ。

「それから芸者になってからも、お客様をつれ出しちやよく活動を見に行つたんですが、どうした訳か、ぱったりその人が写真に出てこなくなつてしまつたんです。いつ行つて見ても、「名めい金きん」

だの「ジゴマ」だのつて、見たくも無いものばかりやつているじやありませんか。しまいには私も、これはもう縁がないもんだとさつぱりあきらめてしまつたんです。それがあなた……」

ほかの連中が相手にならないもんだから、お徳は僕一人をつかまえて、しやべっているんだ。それも半分泣き声でさ。

「それがあなた、この土地へ来て始めて活動へ行つた晩に、何年ぶりかでその人が写真に出て来たじやありませんか。——どこか西洋の町なんでしょう。こう敷石があつて、まん中に何だか梧あおぎ桐りみたいなの木が立っているんです。両側はずっと西洋館でしてね。ただ、写真が古いせいか、一体に夕方みたいにうすぼんやり黄いろくつて、その家や木がみんな妙にぶるぶるふるえていて——そりやさびしい景色なんです。そこへ、小さな犬を一匹つれて、その人があなた煙草をふかしながら、出て来ました。やっぱり黒い服を着て、杖をついて、ちつとも私が子供だった時と変つちやいません……」

ざつと十年ぶりで、恋人にめぐり遇つたんだ。向うは写真だか

ら、変らなかるうが、こっちはお徳が福竜になっている。そう思えば、可哀そうだよ。

「そうして、その木の所で、ちよいと立止つて、こっちを向いて、帽子をとりながら、笑うんです。それが私に挨拶をするように見えるじゃありませんか。名前を知つてりや呼びたかつた……」

呼んで見給え。気ちがいだと思われる。いくらYだつて、まだ活動写真に惚ほれた芸者はいなかるう。

「そうすると、向うから、小さな女異人が一人歩いて来て、その人にかじりつくんです。弁士の話じゃ、これがその人の情いろおんな婦ななんですよ。年をとっている癖に、大きな鳥の羽根なんぞを帽子につけて、いやらしいいったらないでしょう。」

お徳は妬やけたんだ。それも写真にじやないか。

(ここまで話すと、電車が品川へ来た。自分は新橋で下りる体からだである。それを知っている友だちは、語り完おわらない事を虞おそれるように、時々眼を窓の外へ投げながら、やや慌しい口調で、話しつつけた。)

それから、写真はいろいろな事があつて、結局その男が巡査につかまる所でおしまになるんだそうだ。何をしてつかまるんだか、お徳は詳くわしく話してくれたんだが、生憎あいにく今じや覚えていない。

「大ぜいよつてたかつて、その人を縛つてしまつたんです。いいえ、その時はもうさっきの往来じやありません。西洋の居酒屋か

何かなんでしょう。お酒の罎びんがずうつとならんでいて、すみの方には大きな鸚鵡おうむの籠かごが一つ吊下げてあるんです。それが夜の所だと見えて、どこもかしこも一面に青くなっていました。その青い中で——私はその人の泣きそうな顔をその青い中で見たんです。あなただつて見れば、きつとかなしくなつたわ。眼に涙をためて、口を半分ばかりあいて……」

そうしたら、呼笛よびこが鳴つて、写真が消えてしまつたんだ。あとは白い幕ばかりき。お徳の奴の文句いが好い、——「みんな消えてしまつたんです。消えて儂はかなくなりはにけりか。どうせ何でもそうしたもんね。」

これだけ聞くと、大に悟っているらしいが、お徳は泣き笑いを

しながら、僕にいや味でも云うような調子で、こう云うんだ。あいつは悪くすると君、ヒステリイだぜ。

だが、ヒステリイにしても、いやに真剣な所があつたつけ。事によると、写真に惚れたと云うのは作り話で、ほんとうは誰か我々の連中に片恋をした事があるのかも知れない。

（二人の乗っていた電車は、この時、薄暮はくぼの新橋停車場へ着いた。）

（大正六年九月十七日）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996年（平成8）7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

片恋

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>